

特集① みんなが安心して生活できる

避難所をつくる

災害が発生したときに生活する場となる「避難所」。
能登半島地震では、発災直後に最大4万人以上が避難所で生活しました。そこでは、高齢者や障害者への配慮が不十分なケースや、女性用トイレ・更衣室や生理用品の不足が問題化しました。

これらの教訓を活かした、避難所運営のあり方について紹介します。

☎ 危機管理課 ☎ 30-6150 FAX 23-1777



◀避難所となった能登町立松波中学校の様子

「避難所」とは

避難所は**災害で家を失った人などが一時的に生活する場所**で、自分の家や仮設住宅が用意できるまで滞在します。東日本大震災や阪神淡路大震災などから、円滑な避難所の運営を図るには、市職員だけでなく、地域住民が避難所の管理運営に関わることが不可欠であるとされています。さらに、被災者の中には、不安や恐怖、環境の変化により、さまざまな問題が発生します。被災者の気持ちを理解し、地域の状況に合わせた細やかな避難所運営を行うためには、地域の方の関わりが重要であると考えています。

避難所での生活のルール

避難者みんなで運営する (女性も参画する)	避難所で決めた 生活ルールを守る	過去の災害では、 女性用トイレ・更衣室や生理用品の不足、女性への性被害が問題化 しました。 避難所の運営には女性が参画し、多様な視点を取り入れることが大切です。また、 防犯ブザーを非常持出品に用意 することや、 見守り・声かけ をし、 安全・安心な避難所 をつくりましょう。
お互いを思いやる	手洗いや換気、適度な体操など健康に気をつける	

避難所設置から撤収まで



インタビュー

宮城県石巻市の中学校で教員をしていた頃に東日本大震災を経験された北川さんにお話を聞きました。



稲枝中学校 北川直子さん

Q：震災が起きた当日、どのような状態でしたか？

その日は午前卒業式があり、生徒たちが全員帰った後に教員みんなで打ち合わせをしているところでした。揺れが収まった後、一時間後にはもう津波が来ているような状況でした。たくさんの方が学校に避難されてきましたが、その中には卒業式を終えた生徒や帰宅途中に引き返してきた生徒もいました。

学校周辺は、津波の影響で水が引かずガレキが押し寄せてきていました。東北の3月はまだまだ寒く、雪も降っている、そんな状況でした。

Q：避難所はどのような状況でしたか？

浸水していない4階の教室が避難所となりました。1つの教室に避難されてきた方々がぎっしりという状況でした。

地震が発生した日は、飲まず食わずでした。2日目に学校で備蓄していたビスケットを、避難者の皆さんと2枚ずつ分け合って食べました。自衛隊の物資をいただいたのが3日後。3日ぶりの食事で、胃が小さくなっていたのか、おにぎり一つを食べるのがやっとだったのを覚えています。



◀当時の様子(彦根市撮影)



▶当時の様子(彦根市撮影)

避難物資には限りがあり、日常がない状況の中で、「**できることはする**。使えるものは使う。」という状態でした。体育館の紅白幕を破ってタオル代わりに、カーテンや学級旗、模造紙は毛布に、段ボールはマット代わりにしました。体育館のステージの幕の布も、切って毛布代わりにしました。あるもの全てをなんとか使うしかありませんでした。

Q：避難所で生活するために必要な意識とは？

自分の身は自分で守るという意識が大切です。運営する人、支援を受ける人という区別が無いのが災害です。**避難所は、「みんなで運営するもの」**で、できることをみんなでする、そして支え合い・譲り合いの意識がすごく重要だと感じました。

今でも覚えています。当時、卒業式の服装のまま高齢者の付き添いをしていた時に、避難してきた方

が毛布を掛けてくれたり、マフラー代わりにタオルをくださったりしました。生きるための極限状態では人は良くも悪くも変わってしまうものですが、譲り合いの気持ちがそこにはありました。

また、日頃から、避難するときに持ち出すものを備えておくことも大切です。特に水や食料など、今一度確認していただきたいです。

できていますか、災害への備え

▶避難所運営マニュアル

避難所運営について、流れや方法の指針を詳しくまとめています。



▶防災マニュアル

日頃から災害が起きた時に備えられるよう、避難所や備蓄品などについて、まとめています。

お手元の冊子が彦根市ホームページをご確認ください。



▶彦根市公式LINE

ハザードマップの確認や、最寄りの避難場所を調べることができます。



▲登録はこちらから